

博士論文審査要旨

高田宏史氏論文題目

「チャールズ・テイラーの多元主義的政治理論

『世俗主義』の再検討を中心に」

早稲田大学

大学院政治学研究科

審査要旨

高田宏史氏による博士学位申請論文「チャールズ・テイラーの多元主義的政治理論『世俗主義』の再検討を中心に」はA5 版本文 210 頁、文献表 35 頁、合計 245 頁からなる論文である。以下、1．論文の構成と概要、2．論文の特徴と評価、3．結論の順で審査要旨を記す。

1．論文の構成と概要

申請論文は「序論」、第一部、第二部、および「結論」から構成されている。以下はその目次である。

目次

凡例

初出一覧

序論

- 一 チャールズ・テイラーの先行研究
- 二 テイラー研究の課題
- 三 本稿の目的と意義
- 四 本稿の構成

第一部 世俗主義の再検討へ

第一章 哲学的人間学による多元性の擁護 言語・自己・自由

- 一 問題設定
- 二 ヘーゲルからの継承／ヘーゲルへの批判
 - 1 ヘーゲルからの継承
 - 2 ヘーゲル批判
- 三 言語と自己をめぐる問い
 - 1 言語と意味をめぐる問い
 - 2 「自己解釈する動物」としての人間
 - 3 『自己の源泉』における言語論と自己論の統合
- 四 本来性としての自由
- 五 結論

第二章 「承認の政治」と超越性 「地平の融合」とアガペー

- 一 問題設定
- 二 承認の政治による多元性の擁護
 - 1 政治哲学的課題としての承認
 - 2 「地平融合」と本来性
- 三 ヘルダーの有神論 = 存在論
- 四 テイラーにおける「超越性」
- 五 承認の政治における有神論の意義
- 六 結論

第三章 カソリシズム・多元主義・世俗化 『世俗の時代』における世俗性の系譜学

- 一 問題設定
- 二 テイラーの「カソリシズム」への評価
- 三 世俗化と「信仰の条件」 『世俗の時代』の議論から
 - 1 『世俗の時代』の目的
 - 2 世俗化
 - 3 現代社会における信仰の条件と世俗主義のディレンマ
- 四 解釈学から系譜学へ 「宗教的転回」を再考する
- 五 結論

第二部 世俗主義と政治理論

第四章 世俗主義と多元主義 マイケル・サンデルとテイラー

- 一 問題設定
- 二 サンデルとテイラーにおける公共的なものをめぐる構想
 - 1 サンデルにおける公共的なもの
 - 2 テイラーにおける公共的なもの
- 三 サンデルの「被贈与性の倫理」
 - 1 被贈与性の倫理とは何か
 - 2 被贈与性と世俗性
- 四 テイラーにおける排他的人間主義批判
 - 1 世俗化テーゼの再検討と排他的人間主義
 - 2 排他的人間主義の限界とアガペーによる解決
- 五 多数的近代性へ向けて
- 六 結論

第五章 世俗主義と暴力 タラル・アサドとテイラー

- 一 問題設定
- 二 テイラーの暴力論 世俗化された「スケープゴート」と「聖戦」
- 三 アサドの暴力論 暴力の正統化と世俗主義の「道徳的優越性」
- 四 世俗主義の暴力を克服する
- 五 結論

第六章 世俗主義とデモクラシー ウイリアム・コノリーとテイラー

- 一 問題設定
- 二 リベラルな世俗主義と「純粋性」への批判
- 三 コノリーの「深い多元主義」とデモクラシー
- 四 コノリーの「無神論的」多元主義とテイラーの「カトリック的」多元主義
- 五 テイラーのデモクラシー論 包摂と排除
- 六 結論

結論

残された課題 テイラーの二つのデモクラシー論

文献表

本論文で申請者はテイラーの政治理論とカソリシズムとの関係を明らかにしたうえで、それが今日の政治理論においていかなる意義をもちうるのかを考察している。

第一部「世俗主義の再検討へ」は三章からなり、テイラーの著作の時系列に沿った内在的理解をつうじて、主としてなぜテイラーがカソリシズムを自らの政治理論のなかに明示的に導入しなければならなかったのかという問いと、テイラーのカソリシズムがどのような内容を有しているのかという問いとに答えることを目的としている。

第二部「世俗主義と政治理論」も三章からなり、テイラーのカソリック的多元主義に基づく政治理論を様々な思想家のそれと比較することで、主としてテイラーのカソリシズムと政治理論との関係、とりわけ多元主義的政治理論との関係はいかなるものであるのかという問いと、彼の「カソリック的」多元主義は現代の政治理論においていかなる意義を有するのかという問いとに回答することを目指している。

第一章「哲学的人間学による多元性の擁護 言語・自己・自由」では、『ヘーゲル』から『自己の源泉』に至るテイラーの思想的な歩みを、テイラーがヘーゲルのなかに見出した哲学的・政治理論的課題との一連の格闘の歴史として提示する。それは、『ヘーゲル』において明示された、全体性と個別性の媒介を通じた和解という課題に、テイラーがどのように取り組んできたのかを明らかにすることである。そして、この課題に取り組むなかで、テイラーがなぜそしてどのようにして「ユダヤ・キリスト教的伝統」を自らの思想のなか

に明示的に導入しなければならなかったのかを明らかにすることがこの章の目的である。

第二章『『承認の政治』と超越性 『地平の融合』とアガペー』では、テイラーの「超越性」観念がいかにかヘルダーにおける「神」観念と相同性を有しているかを明らかにすることによって、彼のカソリシズムが、いわばヘルダーの相貌を帯びていることを明らかにすることを目指す。テイラーにおける「超越性」は、必ずしも意志をもった人格神ではなく、ヘルダー的な非人格神の影響を多分に受けているとされる。

しかしこうしたテイラーのカソリシズムに対しては、前述したように「無神論への敵意」がしばしば指摘されてきた。こうして第三章「カソリシズム・多元主義・世俗化 『世俗の時代』における世俗性の系譜学」ではこのような批判がどのような論拠に基づいているのかを明らかにした上で、『世俗の時代』においてテイラーがこのような批判を回避しているのかどうかを精査される。『世俗の時代』においては、その内容に関して言えば形而上学的な立場の多元性が『自己の源泉』よりも肯定的なかたちで定式化されており、かつ方法論的にはテイラーが「新ニーチェ主義」の思想家としてこれまで批判してきたミシェル・フーコーの系譜学的手法を取り入れることによって、「無神論」を肯定的に取り扱っているとされる。

第四章「世俗主義と多元主義 マイケル・サンデルとテイラー」では、しばしば「コミュニタリアン」として同列に語られることの多い、マイケル・サンデルの多元主義とテイラーのそれとを「世俗主義」の観点から比較することで、テイラーの「カソリック的」多元主義が、サンデルの世俗主義的（かつ共和主義的）なそれと比べて、どのような特徴を有しているのかが提示される。彼の「カソリック的」多元主義の特徴は、世俗主義的な多元主義においては等閑視されていた「近代の複数性」という事実を光を当てるものであるとされる。

第五章「世俗主義と暴力」では、テイラーがリベラルな世俗主義 あるいは世俗主義的なリベラル・デモクラシー の直面する難問であると考え、「カテゴリーに向かう暴力」の問題に、テイラーが彼の「カソリック的」多元主義の立場から、どのような処方箋を提示しているのかが明らかにされ、その意義が考察される。その際、テイラーと同じく

しかしテイラーとは異なった「イスラム」という基盤から この問題を精力的に論じている、宗教人類学の泰斗、タラル・アサドの議論とテイラーのそれとを比較する。テイラーは、政治的知恵としての「赦し」をもって暴力批判を展開するが、そこには固有の限界もまた存在していることが本章では指摘されている。

第六章「世俗主義とデモクラシー ウィリアム・コノリーとテイラー」では、世俗主義的リベラル批判に関しては多くの論点をテイラーとは共有しながらも、テイラーとは異なり「無神論」という立場から世俗主義の修正を試みる政治思想家、ウィリアム・コノリーの多元主義論とテイラーのそれとを比較することで、テイラーの「カソリック的」多元主義がデモクラシー論においていかなる意義を有しているのかが示される。両者の議論は、デモクラシーの原理がそれ自体として多元主義的でありうるのか、あるいはデモクラシー

の原理はそれ自体のみで安定しうるのかという問いにたいする独創的な解答を提示しているとされる。

そして「結論」において、これまでの議論を総合し、テイラーの「カソリック的」多元主義が有する意義と限界を分節化することで、本論文は閉じられている。テイラーはイバン・イリイチにしたがって、善きサマリア人の寓話をそのキリスト教的デモクラシー論の核に据えている。そしてまた彼は、イリイチにしたがって、あらゆる道徳的コードへのフェティシズムを危険なものとして退けてもいる。しかし、こうしたテイラーの新しいデモクラシー論の展開は、彼のこれまでの政治的コミットメントとのあいだに緊張関係をもたらすものではないのか。この問いの探究を以って本論文の結論とされる。

2. 論文の特徴と評価

各審査員によって様々な視点から、申請論文に関する分析がなされ、多くの意見が述べられた。

1. 論文全体について

(1) 本申請論文は、テイラーの諸著作に内在しながら、説得力のある議論と解釈がなされている、非常に興味深いテイラー論である。テイラーの生涯の思想的展開において彼のカソリズムが規定的な影響を与えたことを重視し、そうしたカソリズムの影響という視点からテイラーの政治理論全体、その思想的発展のプロセスを精緻に跡づけた力作である。

(2) 申請者はテイラーの政治理論の諸著作を知悉しており、その政治理論について十分な考察と評価がなされており、その内在的理解の確かさと信頼度は高い水準にある。申請者はさらに現代政治理論の諸潮流についても十全な知識と理解を保持しており、この面でも高く評価できる。

ただし、テイラー政治理論を適切に理解するためには現代哲学、現代神学、宗教学、宗教社会学の諸動向などについての知見が必要であるが、この点については申請者の側の準備は多少とも不十分であることは否定できない。

(3) テイラーの個性的なカソリズムの信仰と哲学から、テイラー政治理論の展開と意義とを明らかにしようとする申請者の理論的試みは、多くの反論にもあうであろう。しかし、その試みは、興味深いものであり、全体的に説得力のある立論を提示している。テイラーの宗教思想、世俗主義論へのアプローチとしては、本申請論文は、現在の世界のテイラー研究の一般的趨勢のなかでも群を抜いていると思われる。

(4) テイラーにおけるカソリズムの位置づけについて、申請者は前提として「なぜテイラーがカソリズムを自らの政治理論のなかに明示的に導入しなけりなかつたのか」(例えば、9 頁)という問いを発している。この問いの重要性について、審査員たちは、まだ十分に説得されてはいないといえよう。むしろ若い時代からのカソリズム的前提が、テイラーの生涯の後半において如実に自ずと表面に出てくるようになったと考えられないであろうか。また申請者自身、本申請論文において上記の前提的な問いには十分に答えておらず、また論証もなされていないように思われる。ルー

ス・アビーが、1990年代以降、テイラーに「宗教的転回」があったという議論(例えば、82頁)をしているが、はたしてそれがテイラー自身の明確かつ自覚的な転回だったのかどうか、判然としない。この問題について申請者は、本申請論文においてテイラーがカソリズムを自覚的に導入したという解釈と、暗黙のうちにあったものが後期に顕在化するようになったという解釈の二つのあいだで揺れ動いてきたと答えた。そして今では後者の解釈の方に傾きつつあると答えた。この問題について、本申請論文はまだ両義的な印象を与えるので、より明確な立論が求められると思われる。

II. 個別の点について

審査員たちの側から個別的な点について質問やコメントがなされた。そのいくつかを以下に記しておきたい。

(1) 申請者はサンデルの共同体主義を共和主義・世俗主義のカテゴリーで括っている(例えば、11頁および第四章)。たしかにテイラーと比較した場合、サンデルがより世俗主義的であることは事実である。しかし、ロールズ的リベラリズムの価値中立主義を批判するサンデルの場合、テイラーと同様、背後に“situated self”の理解があり、そこには彼のユダヤ教の信徒としてのアイデンティティと活動がうかがわれるように思われる。また、サンデルの「被贈与性の倫理」とは世俗主義にも開かれているものの、元々は宗教的な発想のように思われる(123-127頁)。

申請者はこのコメントに対して、サンデルの場合、テイラーとは異なり、自らの宗教的信条を政治理論に明示的に投影することに禁欲しており、それは彼の共和主義的政治理論のスタンスであると説明した。この点ではサンデルは、むしろ彼にとっての対抗的パラダイムであるリベラリズムに近似している、と指摘された。

(2) テイラーは排他的人間主義と格闘すると同時に、前時代的な宗教的絶対主義の回帰は絶対ありえないし、許容しえないと考えているわけで、宗教がむしろ世俗主義の健全な面をサポートしつつ、同時に世俗主義の排他性や自己絶対化の毒牙を除き、人間の自由と社会や文化の多元主義に貢献する方途を模索しているように思われる。

この関連で審査員から、「世俗の時代」というテイラーの考え方について質問がなされた。つまり、テイラーは、今日、一部の宗教学者、宗教人類学者などが指摘している「現代＝宗教復興の時代」という捉え方には反対すると思われるが、この問題はどのように考えているのか、という問いである。申請者の回答は次のようなものであった。世俗化とは、テイラーによれば、第一に「有神論的・超越的な構成的善のヘゲモニーが衰退し、第二に人間主義的・内在的な構成的善がそれへのオルタナティブとして興隆していくという二重の歴史的プロセス」(87頁)である。そうしたテイラーの観点からいうならば、現代は一部の宗教の回帰現象がみられたとしても、全般的には世俗化の時代と捉える必要がある。ハーバーマスも「ポスト世俗化時代」として現代を捉えるが、これは上記の「現代＝宗教復興の時代」とは異なり、世俗化がすでに行き着くところまで行き着いた時代という意味である。この場合、テイラーの理解とは衝突しないが、テイラー自身は、そうした現代を「ポスト世俗化時代」とは呼ばないであろう。申請者の論点はきわめて説得的で明確であると思われる。

(3) テイラーの「超越性」は、一方において、境界の外部にいる他者を受容するよう人々を

促す「アガペー」を作動させるものとして、他方において、そのつどの境界をもつ「政治的アイデンティティ」のうちに現前するものとして示されており、その両義性をどう理解すればよいかという質問が審査員からなされた。申請者の答えは、近年のテイラーの思想においては主として前者のはたらきが強調されており、後者については、宗教者も、自らの信仰に従いながら、なおも特定の政治的共同体にコミットしうる論理を示したものである、ただし、政体へのパトリアなど、政治的アイデンティティと超越性の関係についてはさらに検討すべき問題が残されているというものであった。

(4)カソリシズムは、テイラーの思想において、諸々の宗教／文化の一つとして位置づけられているのか、それともそれらを包摂しうるような普遍的価値をもつとして(少なくとも暗黙のうちに)捉えられているのかという審査員の問いに対して、申請者は、テイラーはつねに前者("one of them")としてカソリシズムを位置づけているが、その際、カソリシズムには、仏教などとともに、信仰の多様性・流動性をも容認しうる「差異を横断する統一性」の論理に最も親和する宗教の一つであるという質的な評価が同時に与えられている、と答えた。

申請者の応答は、テイラーのテキストの十分な理解にもとづいているだけでなく、提起された問いを真剣に受けとめ、あらためて問題を検討しようとする柔軟なものでもあり、研究者としての力量と誠実な姿勢を感じさせるものであったことを付記しておきたい。

3 . 結論

以上をふまえ、審査員全員一致の結論として、高田宏史氏による申請論文は博士(政治学)の学位に十分に値するものであるとの判断がなされた。

2010年6月30日

主査	早稲田大学教授(Ph.D., The University of Chicago)	飯島昇藏
副査	早稲田大学教授	齋藤純一
副査	国際基督教大学教授(Ph.D., Princeton Theological Seminary)	千葉真